

## 心のつながり

大津 隆文

NHKに『ドキュメント72時間』という番組がある。ある店舗など特定の場所を取材現場として、三日間そこに入り出る名もなき人達の素顔を紹介する。先日放映されたのは『根室 “ほっこり弁当”冬物語』。舞台のコンビに年配の男性客が来店、葬儀に出てこれから中標津まで帰るのでお握りを買いに寄ったとのこと。カメラが車までついて行くと、助手席には二年前に亡くなったという奥様の額入り写真、淋しいのでいつも一緒らしい。冷えるからと写真がカーディガンにくるまれていて、目頭が熱くなった。

我が家には私が長男なので仏壇がある。毎朝お茶と水を替えてお経を上げている。家内も季節の果物や菓子、手作りの料理などをお供えている。そうはしつつも、これには一体どんな意味があるのだろうか、との疑問を正直拭い切れない。亡くなった人はもう存在しないのだから、お経は届かないし、食べ物に接することも出来ない。『千の風になって』の方が分かりやすい気がする。

ところが最近ある記事を見て考えさせられた。それは日本経済新聞の『コロナ禍の思想』で批評家の若松英輔氏が、つながり（心）と交わり（対面）について「直接交わることはできずとも誰かを思い、つながることはできる」と述べていたことだ。たしかにコロナのため会うことは出来ないし、電話や手紙のやりとりもしていないが心に浮かぶ人がいる。思い浮かべると心が少し温まるような気がする。それは亡くなった人も同じだ、会えなくてもつながっているのだ。

坂本冬美の名曲『夜桜お七』に「いつまで待っても来ぬ人と死んだ人とは同じこと」という歌詞があるが、そうなのかそうでないのかよく分からない。人が死ぬと肉体は亡くなるが思い出は残っている。会えない人であっても、本当は死んではおらず心の中で生きている。コロナで会えない大切な人と同じように、亡くなった人も自分の人生にとって掛け替えのない存在なのだ。寒いだらうと写真にカーディガンを着せる気に自ずとなるのだろうか。